

### ◆コルンゴルト／バレエ音楽「雪だるま」より前奏曲

エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルトは 1897 年、のちにウィーンの有力な音楽評論家となるユリウス・コルンゴルトの次男として誕生する。ユリウスは若い頃、和声法をブルックナーに師事し、ブラームスの交響曲第 4 番に対する匿名の評論記事でブラームスに気に入られ、マーラーの親しい友人でもあった。これらのことからエーリヒが音楽的環境に恵まれて育ったことは想像に難くないが、それにしても幼いエーリヒの作曲の才能は誰もが目を見張るものがあった。エーリヒのミドルネームは、父ユリウスが敬愛してやまないヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトにちなんで名付けられたものだが、まさか本当に我が息子が「神童モーツァルトの再来」として騒がれることになる日が来るとは、ユリウス自身も想像していなかったであろう。

1910 年、オーストリア＝ハンガリー帝国の皇帝ヨーゼフ 1 世の命名祝日に開催されたウィーン宮廷歌劇場での祝祭コンサートで、エーリヒの処女作であるバレエ・パントマイム「雪だるま」がウィーン・フィルによって初演される。その 2 年前、エーリヒは 11 歳にして既にピアノ曲「雪だるま」を完成させていた。前奏曲、第 1 部、間奏曲、第 2 部から成る 40 分強のこの大作は、エーリヒの情景描写に秀でた作曲の才能に注目したユリウスが、エーリヒに曲を書かせるために自ら書き上げた台本「雪だるま」に付けさせた音楽で、主な登場人物は若き貧しいヴァイオリン奏者のピエロ、ピエロが恋に落ちる美しきヒロインのコロンビーヌ、そしてコロンビーヌを独り占めしたいがためにコロンビーヌを半ば幽閉している叔父のパンタロン。パンタロンに邪険に追い払われたピエロは、パンタロンが酔っ払って雪だるまに挨拶しているのを見て、雪だるまに成りすましてパンタロンの目をごまかすという妙案を思い付き、最後はコロンビーヌを家から連れ出して 2 人でパンタロンの下から逃げ出すという、子供向けで何とも可愛らしいプロットだが、エーリヒが書き上げた曲は、時に甘美な香りすら漂わせるロマンティックで流麗な旋律や、次々と表情を変えていく鮮やかな和声転換に溢れた、とても 11 歳の少年が書いたとは思えないものであった（第 2 部後半でピエロとコロンビーヌが語り合うシーンの夢見るような美しさと言ったら！）。

祝祭コンサートでの管弦楽版のお披露目にあたって編曲を依頼されたのは、エーリヒの作曲の先生であったツェムリンスキー。代表作となる交響詩「人魚姫」を既に完成させていたツェムリンスキーらしい煌びやかなオーケストレーションは、天才少年の華麗で色彩感に満ちたデビュー作を一層引き立て、かくして「雪だるま」は見事に聴衆を魅了し、エーリヒは「神童」として音楽界に一大旋風を巻き起こしたのである。

本日お届けする前奏曲は、雪だるまのワルツ、コロンビーヌのテーマ、そして 2 人の愛のテーマで構成された小品だが、そのような背景を知らずとも、自然と何かしらの情景が目には浮かんでくるような描写力に富んでおり、それこそが本作の最大の魅力でもある。演奏会冒頭、皆様が美しい物語の世界にうっとりしながら過ごしていただけたら幸いである。

参考文献 ・『コルンゴルトとその時代』（早崎隆志 著）、みすず書房

(J. N.)

### ◆コルンゴルト／ヴァイオリン協奏曲 二長調

「ブラームスはお好きですか？」現代の日本でこんな台詞でデートに誘い、OK をもらえる可能性がどれだけあるのか見当もつかない。本日はそのブラームスを楽しみにご来場くださった方も多いと思うが、その前にもう 1 曲、コルンゴルトの代表作の一つ、ヴァイオリン協奏曲をお届けする。まずは「雪だるま」発表後「ヴァイオリン協奏曲」に至るまでの彼の人生をご紹介します。

#### 【デビュー後の歩み】

「雪だるま」で鮮烈なデビューを飾ったコルンゴルトは、20 歳までに約 20 曲の管弦楽曲、歌劇や

小品を作曲し、快進撃を続けた。R. シュトラウス、シベリウス、プッチーニら名作曲家が絶賛し、ニキシュ、ワインガルトナー、フルトヴェングラー、ワルターなど名だたる指揮者が若き作曲家の作品をこぞって取り上げたのだ。そしてその名声は 22 才で書き上げた歌劇「死の都」の圧倒的成功で揺るぎないものとなる。その後オペレッタの編曲に創作対象を変え、ドイツの大演出家兼プロデューサーで当時演劇界の「皇帝」と称されていたマックス・ラインハルトと出会い取り組んだ「こうもり」で再び大成功を取める。1930 年にウィーンの新新聞社が行った存命する最大の作曲家を選ぶ読者アンケートでも 1 位に選出されるなど、コルンゴルトは名声を博したのだった。

だが、1920 年代終わりに始まった世界的不況とナチス台頭によりヨーロッパ情勢は目まぐるしく変わり、コルンゴルトの立場も大きく変わった。1934 年、アメリカに亡命したラインハルトの依頼でハリウッドに行き、映画「真夏の夜の夢」の編曲担当でハリウッドの世界でも成功したのをきっかけに編曲・作曲の依頼が続き、ウィーンと行き来しながら恵まれた環境で創作活動を続け、1936 年にはアカデミー作曲賞を受賞する。1938 年には自身もやむなくアメリカに亡命するが、同年に映画「ロビンフッドの冒険」で二度目のアカデミー作曲賞を受賞。1940 年代半ばまでに 20 を超える映画音楽を担当し、またアカデミー作曲賞にもさらに二度ノミネートされるほどの活躍と、ナチスがユダヤ人作品の演奏を禁止し、彼の作品がドイツ・オーストリアで演奏されなくなったことから、彼はいつしか「ハリウッドを代表する映画音楽作曲家」となった。

ドイツが無条件降伏をした 1945 年、ハリウッドの商業主義に嫌気がさし、また盟友ラインハルトを数年前に失っていたコルンゴルトは、50 歳目前という年齢も考え合わせてある決意をしていた。それは「再びヨーロッパに戻り、クラシック作曲家として活動する」ということだった。そんな中、数年前からあった構想をもとに夏から作曲を始め、秋頃に完成したのが「ヴァイオリン協奏曲」であり、彼の数ある代表作の中でも特に名曲とされる。曲は 3 人目の夫を亡くし落胆する老婦アルマ・ヴェルフェルに献呈された。彼女とはコルンゴルトが「雪だるま」を発表する前からの付き合いで、亡命先のアメリカでも交流があった。何よりアルマはあのマーラーの未亡人として有名である。

## 【ヴァイオリン協奏曲】

### 第 1 楽章 Moderato nobile ニ長調

冒頭 5 音でヴァイオリン独奏が A-D-A-D-G# と 2 オクターブ歌い上げて始まる第 1 主題は映画「砂漠の朝」の愛の主題、その後再度ヴァイオリン独奏にて切なく歌い上げられるイ長調の第 2 主題は映画「革命児ファレス」のカルロッタの主題、と彼自身の作品が引用されている。また展開部でのカデンツァは聴くものをより引きつける。その後第 1 主題をオーケストラが再現し、短めの第 2 主題再現と展開を経て、ヴァイオリン独奏が駆け抜ける中、再び冒頭の 5 音をオーケストラが提示して締めくくる。

### 第 2 楽章 Romanze ト長調

ヴィブラフォン、弦楽器、管楽器による神秘的な雰囲気の中出てくるヴァイオリン独奏の主題は映画「風雲児アドヴァース」のアンソニーとアンジェラの愛のテーマが引用されている。中間部では弱音器をつけたヴァイオリン独奏が無調的に彷徨った後、再び主題が回帰し静かに終わる。

### 第 3 楽章 Allegro assai vivace ニ長調

冒頭より颯爽と登場するヴァイオリン独奏から木管楽器に引き継がれるスタッカートのリンド主題は映画「放浪の王子」の王子の主題を变形したもので、その後オーケストラがベートーヴェンの交響曲第 7 番 4 楽章のリズムで変奏し、さらにヴァイオリン独奏がオリジナルに近い形で朗々と歌い上げる。変奏される動機は A-D-A-G# となっており、第 1 楽章冒頭 5 音との関連性を感じさせる。その後何度も変奏・再現を繰り返す、最後はホルン 4 人の強奏によるオリジナル提示の後、曲が加速し盛大なフィナーレを迎える。ヴァイオリン独奏の緩急激しく入れ替わる名人芸とオーケストラとのやりとりを思う存分堪能していただきたい。

## 【失意の晩年】

初演は完成から2年後の1947年、セントルイス。マネージャーを通して曲の存在を知った稀代の名ヴァイオリニスト、ヤッシュャ・ハイフェッツによってなされ大成功。その後シカゴ、ロサンゼルスでも聴衆は熱狂した。一方ニューヨークのクラシック批評家達は「ハリウッド協奏曲だ」と評価せず、コルンゴルトを大きく失望させた。

それでもコルンゴルトはクラシックへの回帰を続け、1949年に夢にまで見た祖国ウィーンの土を踏み復権を目指したのだが、戦争の傷跡が大きく活動環境が良くなかっただけでなく、亡命して映画音楽に魂を売った人間と疎外され、さらには十二音技法をすら超える音楽の無調的傾向の前に彼の音楽は時代遅れとされ、見向きもされなかった。傷心の中で孫の誕生という喜びを胸に、コルンゴルトは1952年に唯一の交響曲である交響曲嬰へ調（#が6つ！）を作曲するが、ようやく行われるもろくに練習が行われず散々たる結果となった録音用初演の他にまともな演奏会で再演されることなく、1955年失意のうちにハリウッドに戻った。もはや彼にとってウィーンが「死の都」となったのだ。帰国翌年に病に倒れ、1957年その生涯を閉じた。

## 【再評価と本日の演奏に対する個人的な思い】

映画上映が終われば音楽も陽の目をみる事がなくなる。ただコルンゴルトの作品は一時的に姿を消すも、思わぬ形で再び蘇ることとなった。テレビの普及に圧倒された映画業界が、やがて昔の映画ライブラリーをテレビに売るようになったのである。その結果コルンゴルトの音楽が再び人々に届き、またその名が知られるようになった。その後その音楽に魅了された映画音楽ファンに応える動きから「コルンゴルト映画音楽名曲集」が発売され、彼の映画音楽が再録音されると共に彼のクラシック作品も注目されるようになった。さらにナチスに「退廃音楽」と烙印を押され忘れ去られた作曲家達の再評価も、追い風となった。日本では1989年にヴァイオリン協奏曲が、1996年に歌劇「死の都」が、そして1999年に交響曲嬰へ調が初演されており、特に本日のヴァイオリン協奏曲は日本のアマチュアオケでも毎月のように取り上げられるスタンダードな曲となっている（筆者の知る限りにおいても来年1月に名古屋、2月に川崎での演奏会が予定されている）。

筆者は何の知識もなく交響曲の日本初演を聴きその存在を知って以来、コルンゴルトの演奏機会を待ってきたが、まさか当団でハンス・ロット、ツェムリンスキー、マーラー（しかも8番！）に続き演奏するとは夢にも思わなかった。コルンゴルトの音楽は単に映画音楽に似ているのではなく、ジャンルの垣根なく良い音楽を書き続けた彼の音楽を、様々な歴史的経緯から映画音楽がより引き継いだだけと考える。本日の演奏会にコルンゴルト目当てにご来場くださった方々にはもちろん、同じウィーンの地で、ブラームスが亡くなったわずか2カ月後に生まれた天才作曲家がいたことを本日初めて知ってくださった方々にも、そして演奏する我々にとっても、何か心に残る演奏となることを願っている。

- 参考文献 ・『コルンゴルトとその時代』（早崎隆志 著）、みすず書房  
・コルンゴルト／ヴァイオリン協奏曲 スコア、Eulenburg 社  
・コルンゴルト／交響曲嬰へ調 スコア、Eulenburg 社  
・コルンゴルト／ヴァイオリン協奏曲 スコア（石田一志 解説）、全音楽譜出版社

(A. T.)

## ◆ブラームス／交響曲第3番 へ長調

シューマンの後援を得て「ベートーヴェンの後継者」として1800年代半ばの楽壇にデビューしたブラームスは、ドイツ・レクイエム、ハンガリー舞曲などの成功により、若くして名声を博していった。そんな彼が、最初の交響曲である第1番の完成（1876年）までに着想から20年以上もの歳月を要したという逸話は、あまりにも有名である。この逸話は、第二のベートーヴェンたるべきという、周囲からの期待による重圧や、ブラームスの神経質なまでの自己批判の姿勢をよく物語っていよう。

一方で、第2番、第3番については、いずれも数カ月程度と、ブラームスには比較的短期間のうちに作曲されたこともよく知られた事実である。第1番の完成の前年である1875年に42歳でウィーン楽友協会の芸術監督を辞任してからというもの、ブラームスはもはや公職の煩雑さを望まず、欧州各地への演奏旅行のほかは、イタリア旅行とお気に入りの避暑地での作曲活動、という生活を送っていた。避暑地では風光明媚な自然と気心の知れた友人達に囲まれ、そして何よりブラームスにとって大きなプレッシャーであった第1番が完成したことで、雑念なく作曲に向き合うことができ、筆が進んだのであろうか。

こうした生活が続くなか、第3番は、ブラームスが50歳を迎えた1883年の夏に訪れた、ヴィースバーデンにて作曲された。ブラームスはその年の避暑先にヴィースバーデンを選んだのは、当時彼が熱を上げていた、若いコントラルト歌手のヘルミーネ・シュピースと関係があったようだ。ブラームスは彼女との結婚まで意識し、周囲をやきもきさせたが、何事にも慎重なブラームスの性格が災いし、結局この恋愛は成就することはなかった。

第3番は、ブラームスにしては速い筆で作曲されたためか、あるいは習作を破棄してしまう彼の性格のためか、作曲の経過や背景を示す資料は多くは残されていない。避暑先のヴィースバーデンからウィーンに戻ったブラームスを秋に訪ねたドヴォルザークは、ブラームスがピアノで弾いてみせた第3番の第1楽章、第4楽章を聴き、「交響曲第1番、第2番を凌駕する」と評価したそうだ。ブラームスは子供の頃、よくブリキの兵隊のおもちゃで遊んでいたが、兵隊を戦わせるのではなく、陣形を整えて兵隊をきれいに並べることを好んだとされる。第3番はブラームスが生涯で遺した4曲の交響曲の中で最も短いものだが、こうしたブラームスの何よりも構造、構成を重視する姿勢が、短い中にも十二分に反映された作品である。

### 第1楽章 Allegro con brio ハ長調

第1楽章は、管楽器による上行音型「F→As→F」から始まる。この「F→As→F」の動きは楽式論的には「モットー」と呼ばれるが、モットーは主題、旋律ほどのまとまった構造は持たない一方で、その単純さ故に楽曲の基礎を構成しやすく、この音型は第1楽章の至るところに徹底的に顔を出す。ちなみに、「F→A(s)→F」は、ブラームス自身のモットーとされる“Frei aber Froh”（自由に、しかし楽しく）のイニシャルをとったものでもある。

また、この楽章は、3拍×2とも2拍×3とも取れてしまう4分の6拍子で書かれていたり、途中から6拍目がアクセントを持ち始め、6拍目が小節の頭に聞こえてしまったりと、拍子・リズムの面でも面白い仕掛けが施されている。特に、拍子については、冒頭のモットーのF、Asがそれぞれ小節一杯に伸ばされるため、一聴すると何拍子の曲なのか把握しづらいが、ブラームスの自筆譜では付点2分音符2つがタイで繋がれていたことから分かります、基本的には3拍×2の拍感の楽章である。

### 第2楽章 Andante ハ長調

木管の柔らかな旋律に時おり中低弦が応える形で第2楽章は穏やかに始まる。第1楽章でも多用された、拍感を意図的にずらすことで、小節の最後の音を次の小節の頭に聞こえさせてしまう手法が第2楽章でも使用されている。この手法の効果は、クラリネットによる第2主題に至る前の部分で顕著だが、楽章全体を通して、どこか捉えがたいような雰囲気は漂い続ける。

### 第3楽章 Poco Allegretto ハ短調

冒頭のチェロによる美しい旋律は、映画音楽にも用いられたことで有名である。この旋律は、ヴァイオリン、ホルン、オーボエなどの楽器にも引き継がれていく。ブラームスは、「ドヴォルザークがゴミ箱に棄てた旋律の屑をかき集めれば曲が一つ出来上がる」とドヴォルザークの才能を手放して賞賛したが、この第3楽章では、ブラームス自身のメロディメーカーとしての才能が存分に発揮されていると言えよう。

#### 第4楽章 Allegro へ短調ーへ長調

冒頭の弦楽器とファゴットの動きは、先に作曲されたセレナーデ第1番の第2楽章や、ハイドンの主題による変奏曲の第8変奏との類似性が指摘されている。この冒頭の動きに続き、トロンボーンにより第2楽章の主題がコーラルとして示された後は、チェロとホルンというブラームスではお馴染みの組み合わせによる第2主題や、情熱的な呈示部を経て、クライマックスを迎える。最後は、第1楽章の主題が再び現れ、曲は静かに終わる。ブラームスの交響曲の中で、曲が静かに消えるように終わるのは、第3番のみである。

(D. U.)